

行動を保留するリゾートづくり

風景は文化の反映か

片桐尉晶(保昭) ((有) 片桐仏壇店 アトリエピアノ)

はじめに

日本において風景を作る現場をフィールドとして、風景を前にしての行動を再検討し、全ての動物が持つ「保留」という概念で考察した。

フィールドについて

本発表では実際に発表者が風景をデザインする業務を行った経験を事例とするのに加え、リゾートの経営や設計に携わる人々をインフォーマントとした。

文化の反映としての風景

風景は文化や社会を反映した行動の結果とされてきた。西洋近代とは全く異なる文脈で作られた都市空間が織りなす風景。またそれらを作り出す実践や、非西洋、被近代の社会が近代化されるに伴う住民たちの「抵抗」など、文化の反映として風景が作られる実践の過程が文化人類学の対象とされた [片桐 2014, Low 2017]。

風景を感じるという行為は常に遊びや抵抗、建設、デザインなどの「行動」を惹起するわけではない。文化をなぞったり近代に抵抗したり、いずれも行為（行動）のみを直接に誘発するのは短絡的ではないだろうか。本研究ではこの点を、事例と共に見てゆきたい

風景に埋め込まれた行動への疑問

文化人類学でも近代都市デザインでも、景観は何らかの定められた行動を想定した。例えばピグミーのポピと呼ばれる児童用の遊技空間でも近代都市の運動公園でも文化や安全性を満たすようにルールに則ったスポーツを行うように作られる。

しかし、デザイナーにとっては、行動がすでに決められた施設を作ることを面白くない。これは最近のリゾートの悩みと通ずる。

かつてリゾート施設は、運動公園と同じように、社会集団を対象になんらかの行動、つまり遊技を想定して作られていた。巨大な温泉浴場につくられた遊具、長大なすべり台や滝、水流など、入り込み客を飽きさせずに行動させるさまざまな施設を売りにしていた。

ところが現在のリゾートでは、もともとあった景観や施設自体の歴史ドラマを提供することによって差別化を図り、個人客を引きつけなければ生き残ることができない。巨大な施設はむしろ巨額の維持費用だけがかかるお荷物となっている。

近代も、反近代としての文化も、社会 (= 集団)

キーワード 風景、リゾート、社会生物学、保留

に対して行動を当てはめることは同じである。しかし風景を楽しむことについては、こうした行動を人々に直接あてはめることができなくなりつつある。

文化も近代科学も社会として、集団として語られる人々を相手にするのは得意だが、個々の主体を相手にするのは不得意である。そこにリゾートやデザインの楽しさがあるのだ。これをどう解釈すべきだろうか。

感ずることと行動のあいだ

人々は風景を感じたことを契機に行動するのではなく、むしろ行動をやめ、立ち止まるのである。そのうちにゆっくりした後、規範化されていない行動としておしゃべりをしたり食事を楽しんだりするのである。つまり風景と行動の間に、風景を提供する側が行動メニューとして用意できない別な行為があるのである。

この行為は境界状態などとは異なり、行動に移らないことを楽しむもので、むしろ社会生物学でいう、保留(menotaxis)とよべよう。[ティンバーゲン 1975:28-9, 85-8, 93, 115]。

この保留によって社会において決められているさまざまな文化から、私たち1人1人の主体は「文化」や「近代」をも自由に選択することが可能になるのである。風景によって受け入れられ、作られるこれまで言われてきた実践、抵抗も含めた文化は、保留の後の選択の結果といえる。

保留から見る文化の可能性

近代は風景を合理的な行動に対応したオブジェクトとして扱い、文化人類学も風景を非近代的な視点からの行動、例えば文化や抵抗、実践として扱った。しかしどちらも風景を行動に単純に結びつける点では等しく近代的な視点である。

もし風景が行動と直接結びつけることが、保留を考慮に入れない短絡なものなら、他にも私たちは文化現象を短絡して考えているかも知れない。だとするとこの「保留」という概念による文化理解は豊かな可能性を持つといえよう。

参考文献

片桐保昭

2014 『名付けえぬ風景をめざして：ランドスケープデザインの文化人類学』北海道大学出版会。

ティンバーゲン、ニコラス

1975 『本能の研究』永野為武(訳)、三共出版。

Low, SETHA. M.

2017 *Spatializing Culture : The Ethnography of Space and Place*. Routledge.